

## ペトロニウス『サテュリコン』における修辞学教育批判

五之治昌比呂

### I 序論

以下に挙げるのはペトロニウス『サテュリコン』の現存する断片の冒頭である。主人公エンコルピウス、ギトン、アスキュルトスの三人はなんらかの事情で放浪生活をしている。三人はこの町（おそらくプテオリ）に流れ着き、ギトンは宿で留守番、エンコルピウスとアスキュルトスは弁論愛好者（*scholasticus*<sup>(1)</sup>）を装って修辞学学校に行く。そこではちょうど仮想弁論（*declamatio*）の講演会が開かれており、参加者のひとりである教師のアガメムノンと知り合う。彼らは昨今の教育の荒廃について議論を始めた。

*'num alio genere furiarum declamatores inquietantur, qui clamabant: "haec vulnera pro libertate publica excepi, hunc oculum pro vobis impendi; date mihi [ducem] qui me ducat ad liberos meos, nam succisi poplites membra non sustinent"? haec ipsa tolerabilia essent, si ad eloquentiam ituris viam facerent. nunc et rerum tumore et sententiarum vanissimo strepitu hoc tantum proficiunt, ut cum in forum venerint, putent se in alium orbem terrarum delatos. et ideo ego adolescentulos existimo in scholis stultissimos fieri, quia nihil ex his quae in usu habemus aut audiunt aut vident, sed piratas cum catenis in litore stantes, sed tyrannos edicta scribentes quibus imperent filiis ut patrum suorum capita praecedant, sed responsa in pestilentiam data ut virgines tres aut plures immolentur, sed mellitos verborum globulos et omnia dicta factaque quasi papavere et sesamo sparsa. qui inter haec nutrituntur non magis sapere possunt quam bene olere qui in culina habitant. pace vestra liceat dixisse, primi omnium eloquentiam perdidistis. levibus enim atque inanibus sonis ludibria quaedam excitando effecistis ut corpus orationis enervaretur et caderet. nondum iuvenes declamationibus continebantur, cum Sophocles aut Euripides invenerunt verba quibus deberent loqui. nondum umbraticus doctor ingenia deleverat, cum Pindarus novemque lyrici Homericis versibus canere timuerunt. et ne poetas [quidem] ad testimonium citem, certe neque Platona neque Demosthenen ad hoc genus exercitationis accessisse video. grandis et ut ita dicam pudica oratio non est maculosa nec turgida, sed naturali pulchritudine exsurgit. nuper ventosa istaec et enormis loquacitas Athenas ex Asia commigravit animosque iuvenum ad magna surgentes veluti pestilenti quodam sidere afflavit, semelque corrupta eloquentiae regula .... stetit et obmutuit. quis postea ad summam Thucydidis, quis Hyperidis ad famam processit? ac ne carmen quidem sani coloris enituit,*

sed omnia quasi eodem cibo pasta non potuerunt usque ad senectutem canescere. pictura quoque non alium exitum fecit, postquam Aegyptiorum audacia tam magnae artis compendiariam invenit.'

non est passus Agamemnon me diutius declamare in porticu quam ipse in schola sudaverat, sed 'adulescens' inquit 'quoniam sermonem habes non publici saporis et, quod rarissimum est, amas bonam mentem, non fraudabo te arte secreta. nil mirum <si> in his exercitationibus doctores peccant, qui necesse habent cum insanientibus furere. nam nisi dixerint quae adulescentuli probent, ut ait Cicero, "soli in scholis relinquuntur". sicut ficti adulatores cum cenas divitum captant nihil prius meditantur quam id quod putant gratissimum auditoribus fore (nec enim aliter impetrabunt quod petunt nisi quasdam insidias auribus fecerint), sic eloquentiae magister, nisi tamquam piscator eam imposuerit hamis escam, quam scierit appetituros esse pisciculos, sine spe praedae moratur in scopulo. quid ergo est? parentes obiurgatione digni sunt, qui nolunt liberos suos severa lege proficere. primum enim sic ut omnia, spes quoque suas ambitioni donant. deinde cum ad vota properant, cruda adhuc studia in forum [im]pellunt et eloquentiam, qua nihil esse maius confitentur, pueris induunt adhuc nascentibus. quod si paterentur laborum gradus fieri, ut studiosi iuvenes lectione severa irrigarentur, ut sapientiae praeceptis animos componerent, ut verba atroci ( 2 ) stilo effoderent, ut quod vellent imitari diu audirent, <si persuaderent> sibi nihil esse magnificum quod pueris placeret, iam illa grandis oratio haberet maiestatis suae pondus. nunc pueri in scholis ludunt, iuvenes ridentur in foro, et quod utroque turpius est, quod quisque perperam <di>dicit, in senectute confiteri non vult. sed ne me putes improbasse schedium Lucilianae humilitatis, quod sentio et ipse carmine effingam:

artis severae si quis ambit effectus  
mentemque magnis applicat, prius mores  
frugalitatis lege poliat exacta.  
nec curet alto regiam trucem vultu  
cliensque cenas impotentium captet,  
nec perditis addictus obruat vino  
mentis calorem, neve plausor in scaenam  
sedeat redemptus histrionis ad rictus.

sed sive armigerae rident Tritonidis arces  
seu Lacedaemonio tellus habitata colono  
Sirenumve domus, det primos versibus annos  
Maeoniumque bibat felici pectore fontem.  
mox et Socratico plenus grege mittat habenas  
liber et ingentis quatiat Demosthenis arma.  
hinc Romana manus circumfluat et modo Graio

exonerata sono mutet suffusa saporem.  
interdum subducta foro det pagina cursum  
et fortuna sonet celeri distincta meatu;  
dent epulas et bella truci memorata canore,  
grandiaque indomiti Ciceronis verba minentur.  
his animum succinge bonis: sic flumine largo  
plenus Pierio defundes pectore verba.'

dum hunc diligentius audio, non notavi mihi Ascyli fugam . . . et dum in hoc dictorum aestu motus incedo, ingens scholasticorum turba in porticum venit, ut apparebat, ab extemporali declamatione nescio cuius, qui Agamemnonis suasoriam exceperat. dum ergo iuvenes sententias rident ordinemque totius dictionis infamant, opportune subdixi me et cursim Ascyllon persequi coepi.

「この傷を負ったのは国家の自由を守るため、この目をつぶしたのは諸君を守るためだ。さあ、子どもたちのところへと手を引いてくれる者を。膝の臑を切られて、足腰が立たないのだ。」などと叫んでいる仮想弁論家たちは、新手のフリアエにでもとりつかれているんじゃないでしょうか。こんなものでも、雄弁へといたる道を開いてくれるのならまだ我慢もできるでしょう。ところがどうです。誇大な題材やにぎやかなだけで中身のない格言のおかげで、いざ法廷に立ったときには、青年たちは別世界に連れてこられたのではないかと思う始末です。思うに、青年たちは学校に行っても大馬鹿になるだけではないでしょうか。なぜなら、実用に耐えうることはなにひとつ見聞きしないのですから。見聞きするものといえば、鎖を握って海岸に立っている海賊だとか、息子たちに自分の父親の首をはねろと命じる布告を書いている暴君だとか、三人もしくはそれ以上の処女を生け贄にするようにという疫病の際の神託だとか、いわば言葉のハチミツ団子、すべて芥子粒やゴマをまぶしたような言説や所作ばかりではないですか。こんな環境の中で育った者は、思慮が身に付くといっても、それは台所に住み込んでいる者がいい匂いを発しているのと変わりありません。失礼ながらこう言いたい。なによりもまずあなた方が雄弁をダメにしたのだと。耳ざわりのよい空疎な響きでまやかしものを作り上げ、弁論を骨抜きにして殺してしまったのです。ソポクレスやエウリピデスが適切な言葉を探し当てていた時代には、若者は仮想弁論などにはかかずらっていなかった。ピンダロスや九人の抒情詩人たちがホメロス風の詩行で歌うことを敬して遠ざけていた時代には、世間知らずの教師が生徒の才能を台無しにすることなどなかったのです。詩人を証人として引き合いに出さなくても、プラトンやデモステネスがこのたぐいの修辞学訓練に関わっていたなど聞いて

たこともありません。崇高な文体，こう言っているなら，純潔な文体というものは，派手でも大げさでもないのであって，自然な美しさですくと立っているものなのです。最近になって，このようなふくれあがった途方もない饒舌がアジアからアテナイに移り住んで，なにか不吉な星が影響を与えるように，若者たちの心に息を吹き込み野心へと駆り立てました。いったん雄弁の規範が破壊されると，[学芸は]身動きもせず，おし黙ってしまったのです。その後誰がトゥキュディデスの完璧さやヒュペリデスの名声に肩を並べることができたでしょうか。詩だって健康な色に輝いてはいません。なにもかもが同じ食べ物で養われているかのようで，老年を迎えるまで成長できるものなどひとつもないのです。絵画も同じような末路をたどっています。エジプト人が傲慢にも偉大な芸術への安直な近道を発明してからというもの……」

アガ멤ノンが自分が教室で熱弁を振るっていたよりも長く僕が柱廊で演説するのを許さず，こう言った。「若者よ，お前の物言いには凡庸ならざる風味があるし，全く珍しいことだが，お前は健全な精神を愛好している。だから私は秘密の技を使ってお前をだましたりするつもりはない。そのような修辞学訓練において教師が過ちを犯しているとしても当然のことである。狂人といっしょにいればこちらまで発狂するというわけだ。というのは，もし青年たちの嗜好に合った弁論を教師がやらなければ，キケロの言葉を借りれば，「一人学校に取り残される」のだからな。芝居の追従者が金持ちの宴会にありつこうとするときには，相手が聞いて一番喜ぶことは何かとまず思案するものだ。相手の耳に一種の罟を仕掛けなければ，求めるものは手に入らないのだから。そういう追従者のように，弁論術の教師も漁師のごとく針に餌をつけて魚をおびき寄せない限り，獲物の希望もなく岩に座って待ちぼうけということになる。それではどうだということか。非難すべきは親たちなのだ。彼らは自分の子供が厳格な規則に従って進歩して行ってほしいとは思っていないのだ。まず他のあらゆる事柄とともに，子供という希望もまた自分の野心に捧げてしまう。それから願いの成就にはやるあまり，まだ未熟な学生であるのに法廷へと駆り立てる。そして何にもまして重要であると認めている雄弁の衣を，まだ成長過程にある少年に着せようとするのだ。もし親たちが子供に学業の階段を一つ一つ登らせるなら，つまり向学心ある青年が，真剣な読書にひたり，哲学の教えで精神を作り上げ，書いた言葉を容赦ないペン先で<sup>(2)</sup>推敲し，模倣したいと望むものにじっくりと耳を傾け，幼稚な子供が喜ぶものに何一つ立派なものはないと自らに言い聞かせるならば，そのとき初めて弁論は重い威厳をそなえた偉大なものとなるであろう。今日少年は学校で時間を浪費

し、青年はフォルムで笑いものになる。そしてそのどちらよりも醜いことは、少年のときに誤って学んだことを、だれも老年になっても認めようとしないことである。さあ、私がルキリウス風のつつましやかな即興詩を見下しているなどとは思われないように、私も思うところを詩で綴ってみよう。

厳格な学芸を究めんとし、  
偉大なるものに精神を向ける者は、まず自制という  
規則を厳しく守り己の行動規範に磨きをかけよ。  
高慢な暴君の宮殿には目もくれるな。  
子分となって能なしどもの食卓をねらうな。  
ならず者たちと交わって精神の火を  
酒で消すな。買収されて舞台の前に  
陣取り、大口開けた役者に喝采するな。

しかし武装するトリトンの城塞が、  
農夫住むラケダイモンの地が、  
セイレンの住みかが笑いかけたなら、最初の年月を  
詩に捧げよ。マエオニアの泉を至福の胸で飲みほすべし。  
やがてソクラテス派の教えに満たされるなら、自由に  
手綱をゆるめ、巨人デモステネスの武器を打ち鳴らせ。  
しかるのちローマの書き手に取り巻かれよ。ギリシアの調べから  
解き放たれて独自の風味を注ぎ出せ。  
その間フォルムから遠ざかり、ページの上にペンを走らせ、  
めまぐるしく変転する傑物たちの運命を高らかに響かせよ。  
猛き歌に歌われた戦が宴を催せ。  
不滅なるキケロの崇高な言葉が威圧せよ。  
かかる美質を魂にまとえ。かくして豊かな流れに  
満たされて、ピエリス宿る胸から言葉を注ぎ出せ。」

アガ멤ノンの話を熱心に聞いているうちにアスキュルトスがずらかっていたのに僕は気づかなかった。・・・こうして話に熱がこもってきて庭を歩いているとき、弁論愛好者の一団がぞろぞろと柱廊に出てきた。どうやら、アガ멤ノンのスアソリアの後を受けてだれかが即興で演じた仮想弁論が終わったところらしい。青年たちがその弁論の格言を嘲笑したり全体の構成を酷評している間、これはいい機会とこっそり抜け出して、アスキュルトスの後を追った。(Ch.1, 1-6, 2)

『サテュリコン』は主人公エンコルピウスによって一人称で語られる小説であるが、彼はいわゆる「信用できない語り手 unreliable narrator」である。このことについてはすでに別の論文で詳しく論じた<sup>(3)</sup>。簡単に紹介すると次のようなことである。彼はときに妄想に陥る人物であり、読者は彼の語ることを額面どおり受け取れない。特に恋愛に関わる場面においてエンコルピウスは現実を歪めて読者に伝える。もとは卑俗な現実であったものが、彼のフィルターを通ると安っぽいロマンティシズムに染められてしまうのだ。さらに作者は、フィルターを通る前の現実がどのようなものであったのかを読者が推測できるように、いくつかの仕掛けをしている。このような箇所においてはエンコルピウスに対する、あるいは大仰なロマンティシズムそのものに対する作者のアイロニーを見て取ることができるのである。

さて、エンコルピウスが信用できない語り手であることは紛れもない事実であるとしても、それだからといって小説の隅から隅までが信用できないのであろうか。そんなことはあり得ない。しかし、どこが作者がよしとして作っている箇所であり、どこがアイロニーを込めて作っている箇所なのかということ判断するのは容易でない<sup>(4)</sup>。本稿の目的は、上に挙げたエンコルピウスの修辞学教育批判のスピーチを取り上げて、これが作者自身の修辞学教育に対する意見を代弁したものなのか、あるいは作者の意見とはほど遠い、アイロニーの対象であるのかを検証することである。

とはいっても、この箇所は「語り手」エンコルピウスの地の文ではなく「主人公」エンコルピウスの直接話法である。したがって「信用できない語り手」の問題とは少々ずれることになる。しかし、アイロニーの問題という点では本質的には同じである。なぜなら、作者ペトロニウスは「語り手」エンコルピウスと「主人公」エンコルピウスを全く異なる人格として扱っていないからだ<sup>(5)</sup>。それどころか、小説中には語り手が時間の経過を無視して、心理的に主人公と一体化してしまっているような箇所が少なくない。主人公の持っている価値観と語り手のそれとの間にズレはないのだ。それゆえ、「エンコルピウスという一人の人物を、ある箇所で作者がアイロニカルに見ているかどうか」という観点からすれば、語り手の地の文と主人公の直接話法とをそれほど厳密に区別する必要はないのである。

『サテュリコン』のような小説を「アイロニー」という視点から論じることとはごく自然なことに見えるが、小説のあらゆる部分に作者のアイロニーを読み取ろうとする傾向が強まったのは実は最近のことである。もちろん、いくつかの箇所に作者のアイロニーを読み取る解釈は昔から存在した。しかし近年、従来は素朴に読まれていた箇所にまでアイロニー解釈が及ぶように

なったのである。そして、この一種「アイロニー狩り」とでも言うべき研究方向は現在当たり前になってしまった感がある。冒頭の修辞学教育批判の箇所に関する限り、これをアイロニーとして解釈し出したのは Walsh (1970) である。それ以前のペトロニウス研究<sup>(6)</sup>やこうした作品解釈上の問題に関心を持たなかった他分野の研究者は、アイロニーを読み取ろうなどという発想すらわかなかつたようだ。様々な修辞学的作品の注釈や古代修辞学の研究書にも、この部分は典型的な仮想弁論批判の例として紹介されている。

私はこうしたアイロニー説にあえて異を唱えたい。研究者の中で、アイロニー説の存在をふまえたうえでなおかつこの修辞学教育批判が作者の代弁であると主張したのは、私の知る限り KiBel (1978) だけである。しかし彼はこれを論証しているわけではなく、直感的に「そうであるはずだ」と断定しているにすぎない。確かに、「アイロニーが意図されている」と言い立てるのは、そうでないと主張するよりも易しい。該当箇所になんらかの問題点や矛盾があることを指摘して、これはその話者の愚かさの表れである、あるいは作者のアイロニーが働いている証拠であると結論づければいいからだ。しかしこの逆は難しい。いわば「無実の証明」をするようなものだ。作者に直接聞かない限りこのような問題に最終的な判定を下すことは不可能なのかもしれない。しかし私はいくつかの観点から、立場上苦しい反アイロニー説をあえて主張したい。手順として、まずは従来のアイロニー説が本当に妥当なものかどうかを検証することになる。その際議論の前提として、「エンコルピウスとアガメムノンのスピーチと仮想弁論との関係」「登場人物のキャラクターの問題」という二点を考えねばならない。これらは説明に紙面を要するので独立した章にする。また、論の順序が前後してしまうが、「仮想弁論」というものに関する知識を得てからのほうが以降の議論を理解しやすいと思うので、仮想弁論との関係を論じた章を最初に置くことにする。そしてアイロニー説に対する反論だけにとどまることなく、最後の章では私自身の論拠を挙げて反アイロニー説を論証したい。なお、このエンコルピウスのスピーチは、続く修辞学教師アガメムノンのスピーチと切り離すことができない。したがって、こちらも同時に考察することになる。

## II 仮想弁論？

古代ローマの教育は、初等教育における文字の読み書きから始まる。そしてその最終目的は、公の場で立派な演説ができる能力を養うことであった。高等教育の段階はもっぱら *declamatio* と呼ばれる仮想弁論の訓練となる。冒頭で主人公が批判しているのはこの仮想弁論なのだ。*declamatio* には二つの種類がある。ひとつはある状況に置かれた人物にアドバイスを与える形を取る

suasoria, もうひとつは架空の係争を設定してどちらかの側に立って弁論を行う controversia である。この訓練は当初は実用に即したものであったかもしれないが、帝政期には完全に自己目的化してしまった。題材は現実にはありえないような状況を好んで想定するようになり、訓練のための訓練的な創作の練習が行われていたらしい。また学校教育を終えてからも、単に趣味として仮想弁論を作り、講演会を開いてはその腕を競うマニアの大人たちまでいた。

『サテュリコン』の冒頭の舞台はまさにそうした講演会の会場なのである。

最初にはっきりさせておきたいが、この declamatio の現実離れに対する批判というのは古代において全く珍しいものではない<sup>(7)</sup>。アイロニー説を採る Walsh や Conte (1996) すら、エンコルピウスのスピーチの中でも、仮想弁論のテーマの現実離れとスタイルの誇大さに対する批判の部分はペトロニウス自身の意見であると考えている。Slater (1990) と Panayotakis (1995) は頭ごなしにすべてアイロニーであると決めつけているような感があるので、この点についてどう考えているのか分からない。しかし少なくとも、仮想弁論の現実離れを批判することそれ自体まで作者のアイロニーの対象であると明言してはいない。

修辞学教育に対するこのエンコルピウスとアガメムノンのスピーチそのものが修辞的演説であるとする意見がある。まずはこれを検討してみる必要がある。なぜなら、これ自体が仮想弁論だとすれば、批判していることを自らがやっていることになり、それをアイロニー説の根拠とすることができるからである。二人のスピーチをこれ自体仮想弁論であるとする説とそうではないとする説と両方ある。仮想弁論であるとするのは Walsh と Conte である<sup>(8)</sup>。彼らは根拠としてそのスタイルが修辞的であることを挙げる。Walsh によると、このスピーチには対句、キアスムス、アナフォラ、格言 (sententia) など、declamatio に特徴的な要素が多数見られるという。一方、このスピーチは declamatio ではないという意見もある。それは Kennedy (1978)<sup>(9)</sup> の主張であるが、彼の根拠は単純であり、二人のスピーチは内容の点で suasoria と controversia のどちらにも属さないから、というものである。しかし、彼もスタイルに関しては declamatio 風であると言っている（論証はなく直感的に）。

スピーチの内容が仮想弁論のものではないという Kennedy の主張はもっともなものであるが、両者とも少なくともスタイルに関しては declamatio のものであると考えているわけだ。しかし私の見るところ、「declamatio 風のスタイル」などという概念が誤解のもとである。というのも、declamatio だけに顕著に見られる文体上の特徴など分別不可能なのだから。こうしたスタイルは広く「修辞弁論風」と言えばいいのである。要するに、小説において通常期待されるようなスピーチのスタイルとは異なるということだ。さて、エンコ



ルピウスとアガメムノンのスピーチのスタイルが修辞弁論風のものであることはどうやら確実らしいが、以下にこれらのスピーチと仮想弁論との関係を示す重要な事柄を二つ紹介する。

### (1) 予備演習のひとつ「誹謗」

Kennedy が言うように二人が行っているのは文化批判、社会批判であり、内容的に *declamatio* そのものとは言えない。しかしこの「批判」という要素は仮想弁論の（もちろん実際の法廷弁論や政治演説においても）重要な構成要素だったのである。古代ローマの教育において高等教育というのはすなわち仮想弁論の訓練であったが、高等教育に進む前の段階では、弁論を構成する特定の要素だけを個々に練習していた。これを「予備演習 *progymnasmata, praexercitamina*」と呼ぶ。その練習項目のひとつに「誹謗 *psogos, vituperatio*」があった。項目としては「賞賛 *encomion, encomium*」と対になっている。ふつうは特定の人物、例えば神話上の人物とか歴史上の人物を対象として練習するが、人間だけにとどまらず、「正義」「富」「酒」といったものも題材として選ばれていたようである<sup>(10)</sup>。エンコルピウスとアガメムノンのスピーチがこの「誹謗」という修辞訓練を模したものである、とまでは言えない。しかし、ペトロニウスが二人のスピーチを創作する上で、スタイルだけでなく内容の点でも修辞学教育における訓練、あるいは仮想弁論や実際の弁論をふまえている可能性が高いということを指摘したい。

(2) Ch.3,1 の次の言葉は興味深い。エンコルピウスのスピーチ直後の語り手の地の文である。

non est passus Agamemnon me diutius declamare in porticu quam ipse in schola sudaverat,

アガメムノンは自分が教室で熱弁を振るっていたよりも長く僕が柱廊で演説するのを許さず,

訳者の多くがこの *declamare* を比喩的用法と解して、単に「話す」というような意味で訳している。たいていの訳者は修辞学についてきちんと調べていないようで、この箇所についても彼らの訳は頼りにならない。好意的に言えば、*declamare* という言葉があまりに直接的すぎて「仮想弁論を行った」とは訳せないのかもしれない。しかし、エンコルピウスのスピーチが一種の *declamatio* であることを素直に言い表していると解釈しても不都合はない。作者はエンコルピウスのスピーチが *declamatio* を模した一種の弁論であるということを特に隠したいわけではなく、読者は容易にそのことに気づくものと

考えているのではないか。

### III アイロニー説とそれに対する批判

#### [1] エンコルピウスのスピーチについて

ここでエンコルピウスの議論を整理しておこう。

- ・若者がなによりもまず身につけるべきは雄弁である。
- ・それを妨げているのは修辞学教師である。
- ・なぜなら学校で行われている仮想弁論は題材が大げさで現実離れしており、スタイルは派手で誇大かつ空疎なものであるから。
- ・つまり実際の法廷では役に立たないのである。
- ・そのような大げさな仮想弁論は大昔からあるものではない。
- ・理想とすべきギリシアの詩人、作家が活躍した時代にはそのようなものはなかった（つまり雄弁の本質とは無関係のものである）。
- ・誇大なスタイルは後になってアジアから移ってきた。
- ・あっという間に蔓延して、雄弁を破壊してしまった。
- ・現在のローマもその延長である。

これから箇条書きで Walsh らのアイロニー説<sup>(11)</sup>を紹介し、それに対する私の批判を付すことにする。

(1) declamatio の批判をやっついでながら、自身のスタイルが declamatio のものである。(Walsh, Conte)

前章で、エンコルピウスとアガメムノンのスピーチのスタイルが declamatio 風とは言えないまでも、修辞弁論風であるということは確認した。そうであれば、このようなアイロニー説が出てくるのは当然である。この問題は今は保留し、最後の章でまとめて論じることにする。

(2) アッティカ風スタイル対アジア風スタイルの議論は共和政末期のものであり、時代錯誤だ。(Slater, Panayotakis)

[反論] 古代修辞学において文体の分類法にはいくつかあり、「アッティカ風とアジア風」というカテゴリーもそのひとつである。ごく簡単に言えば、アッティカ風は簡潔な文体でありアジア風は華麗な文体である。しかし、アッティカ風対アジア風という対立の構図が出来上がったのがいつのことなのか、実は判然としない。一説によると、まさに共和政末期、キケロとその対抗者との論争の中で生まれたものらしい<sup>(12)</sup>。つまり比較的新しいものな

のである。ところがキケロ以後の人々はこうした経緯を知らずに、この対立の図式が古くからあるものであると思い込んでいたようだ。例えばクインティリアヌス(12,10,16)は「アッティカ流派とアジア流派という分類は古いもの(*antiqua*)である」と言っている。帝政期の他の作家にもはやアッティカ風対アジア風の正面切った議論が見られないことも考え合わせると、存在はよく知られていたがやはり古い議論とみなされていたのであろう<sup>(13)</sup>。こう考えればアイロニー説の根拠になりうる。

「アッティカ風かアジア風か」という議論は確かに時代遅れであったかもしれない。しかし、「アジア風」という言葉を使う使わないは別にして、いわゆる「アジア風」に当たる誇大なスタイルは、帝政期に下火になるどころか、かなりの隆盛を誇っていたのである。それを裏付ける記述をいくつか挙げよう。

・スエトニウス『ローマ皇帝伝』アウグストゥス86

アウグストゥスは優雅(*elegans*)で清楚(*temperatum*)な文体を求め、ばかげた格言(*sententia*)と技巧的な語の配列(*concinnitas*)あるいは古くさい語法を避けたと書かれている。また、アントニウスを批判して、「アジア流弁論家の空疎な*sententia*で満ちた冗長な文体を我らのラテン語に持ち込むのか」と言ったという。

・セネカ『道徳書簡集』114

この書簡は、文体の乱れは心の乱れに起因するということを話題にしている。「アジア風」という言葉は使っていないが、擬古主義的な文体とともに、「アジア風」に当たるような文体を乱れた文体として批判している。すなわち「大胆な比喩を頻繁に使う」「くどくどと述べたり引き延ばしたりする」「派手で仰々しく詩のような言葉」といった要素を挙げている。

・タキトゥス『弁論家に関する対話』35,5

対話者のひとりメッサラは、雄弁が衰退した原因の一つとして、*declamatio*のテーマが現実離れしたものばかりであることを挙げる。「王を殺した者への賞金」だとか「悪辣な下女の後釜」だとか「疫病の治療薬」だとか「母との近親相姦」だとか、そういう学校で毎日練習するような題材を誇大な言葉で(*ingentibus verbis*)追求するのだ」と。つまり、仮想弁論の悪しき特徴として、その文体が大げさであることも批判の対象としているのである。エンコルピウスの言葉と非常によく似ている。

帝政期の弁論あるいは仮想弁論において、誇大な文体は全く衰えてなどい

なかったのだ。だからこそ上に引いた資料は激しい批判を行っているのである。エンコルピウスの議論も同じところを攻撃している。エンコルピウスの主張をよく読めば、そもそもアッティカ風とアジア風の対立を論じているのではないことが分かるはずである。「アッティカ風」「アジア風」という言葉すら使っていない。エンコルピウスの意図はあくまでも仮想弁論の内容の空疎さと文体の誇大さを糾弾することである。エンコルピウスが「アジア」を持ち出すのは、そうした悪しき文体の元凶がアジアであると考えられていたからにすぎない。つまり、誇大な文体を攻撃するという意図に関しては、ばかげたことでも時代錯誤的なことでもないのである。また、アッティカの文人の名を挙げているからと言って、いわゆる「アッティカ風スタイル」が理想であると主張していることにはならないという点も指摘しておく。

(3) ラテンの弁論の墮落を論じているのに、理想的なモデルはギリシア人ばかり。(Slater)

[反論] アジア的スタイルに侵される前の状況を述べているのだから、古典期のギリシアの作家を持ち出すのは当たり前である。修辞学教育なしでも、立派な文体は成り立ちうるという根拠を挙げているわけだ。

(4) 教育の退廃と社会の退廃を結びつける陳腐さがアイロニーの的である。文化上の危機を社会の道徳的退廃に帰するのはローマ人の一般的傾向であるから。また、墮落の原因を探る際に過去の偉大な文学者を引き合いに出すのが陳腐である。(Walsh)

[反論] このようなアイロニー狩りにはどうにも対処できない。まず、エンコルピウスが「社会の退廃」といったことまで議論しているようには見えない。仮にそうだとしても、そうした考え方が「陳腐」であると言えるのだろうか。「陳腐でない」ようなラディカルな考察をした作家が果たしているのか。ペトロニウスだけにそのようなラディカルな態度を期待するのは誤りではないだろうか。過去の偉大な文学者を持ち出すことに関しても同じである。

(5) エンコルピウスのキャラクターを考えれば、彼の述べていることが単なる偽善であることが分かるはずだ。エンコルピウスの目的は、アガ멤ノンの歓心を買って、夕食をごちそうしてもらうことなのである。(Kennedy, Slater, Panayotakis)

[反論] エンコルピウスとアスキュルトスが、アガ멤ノンに夕食をごちそうになろうと狙っていたことは確かである<sup>(14)</sup>。しかし、エンコルピウスの言葉にはアガ멤ノンに取り入ろうとするような気配は全くうかがえない。それどころか、「あなた方が雄弁をダメにしたのだ」とはっきりと非難して

いる。Slaterはこの矛盾を説明するために、「エンコルピウスはへつらうことによってではなく、毅然とした態度を評価してもらうことによってアガメムノンに取り入っているのだ」と主張している。反論はできないが、この場面のためにそれほど微妙な策略を作者が設定するものであろうか。また、先行部分が現存しないので何とも言えないが、エンコルピウスとアスキュルトスがどれほど真剣にアガメムノンに取り入ろうとしていたのか疑問である。なぜなら、アスキュルトスは途中で逃げ出してしまし、熱心に議論していたエンコルピウスも、機会を見つけると具体的な約束もしないうちにアガメムノンのもとを逃げ出してしまふ。夕食にありつこうという意図と、修辞学教育批判とは一貫したものではないと考えるのが妥当だ。キャラクターの問題は次章でさらに詳しく論じる。

## [2] アガメムノンのスピーチについて

アガメムノンの議論も改めてまとめておく。

- ・修辞学教師の非は認めるがそれはやむを得ないことだ。
- ・客の要求に応じているだけ。さもないと生計を立てられない。
- ・非は子供に過度の期待をかける野心的な親の方にある。
- ・真の雄弁に達するには学業の段階を着実に登ることが肝要（読書、哲学、作文の訓練、手本の模倣）。

アガメムノンのスピーチに関しても、アイロニーに解するという発想すらもたない人々は、当時の教育批判の例としてこれを注釈などに引いている。一方アイロニー説を採るペトロニウス研究者は、エンコルピウスの言葉に対して行ったような微妙な分析はあまり行わない。偽善的修辞学教師の言い訳であるから、ペトロニウスのアイロニーの対象であることは明らかであると考え。しかし、教育の荒廃の原因を親の責任とする意見は古代においてかなり一般的なものであった。クインティリアヌス(1,1,4-6)とタキトゥス(Dial. 28,4-7, 29,1-2)の話者メッサラは、教育荒廃の原因の一つとして、親自身が子供の教育にたずさわらず乳母や家庭教師や学校の教師に任せきりにしていることを挙げている。また、スエトニウス(De Gr. 9)によると、文法教師オルビリウスは自著の中で、親の無責任と野心(neglegentia aut ambitione parentum)のせいで教師が被る被害について愚痴をこぼしているという。

教育内容の本質にかかわるエンコルピウスの批判をうまく逸らしてしまっているのは確かである。「教師の言い訳」と非難されるのももったもだ。しかし「生徒とその親の方に非がある。教師は要求に応えざるを得ない」という主張そのものは筋が通っている。また、アガメムノンは言い訳だけに終わ

らず、教育の理想をも説いている。これはクインティリアヌスが説く教育の理想とほとんど同じである。「月並みだからアイロニーの対象になっているはずだ」という例の論法を用いない限り、ここにアイロニーを読み取るべき矛盾点を見いだすのは困難である。

Slater は根拠の一つとして、修辞学教師の立場を喜劇の追従者になぞらえておきながら、詩の部分では追従者になるなど説いていることを挙げている。しかし、前者は実状、後者は理想なのだから矛盾していてもおかしくない。また、複数の学者 (Slater, Panayotakis, Conte) が指摘する根拠は、アガメムノンの人格が言っていることにそぐわない、アガメムノンは自分自身トリマルキオに取り入って晩餐に招待されているのだから、というものである。私は、そぐわなくても言っていることそのものには矛盾点を見い出せないと思う。そもそもキャラクターの一貫性を求めること自体が誤りだと考えるが、このことはエンコルピウスといっしょに次章で詳しく扱うことにしよう。

#### IV キャラクターの問題

私は今、小説のあらゆる部分に作者のアイロニーを読み取るという研究の潮流に対して異を唱えているが、修辞学教育批判の箇所解釈に限らず、小説全体に対するこうした一種「アイロニー狩り」的な研究方針が優勢である背景には、主人公を含めた登場人物のキャラクターの問題に対する誤解があるのではないかと思う。『サテュリコン』研究においてキャラクターの問題は重要であり、十分な議論は別の機会にゆずらねばならないが、この修辞学教育批判の箇所を論じる際にも避けて通れない問題なので、ここでも少しだけ議論することにする。

研究者のほとんどが、エンコルピウスのキャラクターはカメレオンので一貫性がないと言っている。Walsh の表現を使うなら、「愚直／世知に長けた、サディスト／センチメンタル、へつらう／正直」といったぐあいに、場面場面によって互いに矛盾するような性格を見せる。しかし私の見るところでは、彼らはまさにその「一貫性」を前提にしている。全くの矛盾に聞こえるかもしれないが、それはこういうことだ。彼らは、エンコルピウスが自分の置かれた様々な状況に対処するために、状況に応じた「役」を演じるのを常とする人物である、と考える。つまり、エンコルピウスの性格は「状況ごとにくろくろと変化する」という点で一貫しているわけである<sup>(15)</sup>。実はこうした考え方がアイロニー狩りの出発点になっている。アイロニー狩りをやりたがる学者にとって、「状況に応じて本来の自分ではない自分を演じる」ということはそれだけで偽善であり、エンコルピウスは全くの偽善的人物であるという結論になる。それで、エンコルピウスが演技をしていると考えられる箇

所には必ず作者のアイロニーが込められていると解釈するわけである。

この論法でいくと、今回取り上げた修辞学教育批判の場面では、エンコルピウスは「修辞学に対して一家言ある学識豊かな人物」という役を演じていることになる。これは本来の彼の人格ではなく、修辞学教師アガムノンに取り入って夕食にありつくための戦略なのだから、偽善的なポーズであるという結論になる (Kennedy, Slater, Panayotakis)。私はこうした考え方には賛成できない。エンコルピウスが「役を演じる人物だ」と言うとき、これらの学者は（自分で気づいているかどうかは分からないが）エンコルピウスには役を演じていないときの「本来の顔」というものがあることを想定している。しかし、彼に「役を演じていないときの顔」「本来の人格」などといったものがそもそもあるのだろうか。作者がそのようなものを想定しているとは考えられない。言葉を変えるなら、人格を変化させるのはエンコルピウス自身が具体的な意図を持って自覚的に変えているのではないということである。作者は、「人格を変えるという点において偽善的な人物」などという設定は行っていない。エンコルピウスの人格は、その場面その場面での「作者の」意図に合わせて自由に変化させられているのだ。エンコルピウス自身は自分の人格が変化していることを自覚していない<sup>(16)</sup>。したがって、「偽善なのだからアイロニーの対象と解釈する」という態度は捨てなければならない。その場面その場面ごとの「作者の」意図を考えた上でアイロニーか否かを判断すべきである。

例えば、私が別の論文で扱った恋愛が絡むエピソードでは、ギリシア小説に見られるような過剰なロマンティズムをからかうことが作者の目的である。そこでは、エンコルピウスは「ロマンティックな妄想をいだく愚かな人物」に仕立て上げられる。したがって明らかにアイロニーの対象となる。

しかしエンコルピウスは常に妄想を抱く人物なのではない。エンコルピウスが傍観者になる場面、特に「トリマルキオの饗宴」の部分を考えてみればよい。ここでの作者の目的はあくまでもトリマルキオと彼を取り巻く世界の悪趣味ぶりを描くことにある。エンコルピウスはほとんど観察者に徹している。所々エンコルピウスの愚かな行動が描かれはするが、それはエンコルピウスの性格を描き出すのが目的ではない。次に起こる出来事に読者の興味を引きつけるための作者の工夫である。また、彼は自分の価値判断を表明しもあるが、それらは要するに嫌悪感であり、だれもが納得できるような類のものである。作者はこうした主人公の価値判断をアイロニカルに提示してはならず、読者に笑ってもらおうなどとは意図していない。

今問題にしている箇所、修辞学教育に対して容赦のない非難を浴びせる姿も同様である。主人公は自覚的にこのようなポーズを取っているのではない。彼は本気で弁じていることになっているのだ。そうでなければ、前章で

も述べたように、「雄弁をダメにしたのはあなた方だ」と取り入るべき相手に直接的な非難をおつけるわけがないし、アスキュルトスが抜け出したのに気づかないくらい「熱心に聞き入っていた」わけがない。このエンコルピウスの態度も、ある特定の目的のために作者が作り出したこの場限りのものであると考えるべきである。その目的とは、結論を言ってしまえば、修辞学教育に対する自分の見解を代弁させることである。

主人公のキャラクターについてここまで述べてきたことは他の登場人物に対しても当てはまるが、ここでは問題のアガメムノンについてだけ述べるにとどめる。アイロニー論者の根拠は、トリマルキオに媚びへつらって晩餐に招待されているのが本来のアガメムノンの正体であるのに、問題の箇所では教育の理想像を説き、「媚びへつらうな」と偽善的なことを言っているから、というものであった。しかしエンコルピウスの場合と同様、媚びへつらうアガメムノンと教育の理想を説くアガメムノンとが、そもそも人格の上で必ずしも一致する必要はない、という前提に立てば話は変わってくる。先に述べたように、彼のスピーチの内容そのものには極端に愚かしいところはないのだ。したがって、「キャラクターの一貫性」を持ち出さなければ、正当な内容を無理にアイロニーの対象と解釈する必要は全くなくなるのである。

## V 結論

ここまでは他の学者のアイロニー説を採り上げて、ひとつひとつ反論を加えるというネガティブな議論を行った。「無実の証明」という性質上やむを得ないことである。最後に、私なりにもっと積極的な論拠を挙げてエンコルピウスとアガメムノンの主張がペトロニウス自身の見解であることを示そうと思う。

(1) 主人公エンコルピウスは、モラリスティックな批判をしょっちゅうやる人物としては描かれていない。例えば、そのような批判を行ってもよさそうな「饗宴」においては、批判そのものがそう多くはないし、道徳的な観点からの批判はほとんど行っていない。トリマルキオと彼をとりまく世界に対する批判のほとんどは、「自分にとって不愉快である」ということが判断基準になっている。語り手は読者に「見せる」ことに徹しており、モラリスティックな価値判断は読者に委ねられているのだ。そのため、冒頭のスピーチのようなモラルに関わる直接的批判は小説の中では異質のものに映る。それゆえ、作者はなんらかの特別な意図を持ってこの場面を作ったことが推測できる。主人公のキャラクターを造形するために、つまり主人公の愚かさをコミカルに描き出すことを第一の目的として、このような一見したところ正論に映る



スピーチをわざわざ作ったとは考えがたい。それが目的ならばもっとばかばかしいものに仕立て上げたはずである。

(2) 該当部分が現存していないが、主人公たちがトリマルキオの饗宴に招待されるというストーリーの展開のためにアガメムノンが一役買っていることはほぼ間違いない。しかし、招待されるための設定は別の方法を使っても可能であり、修辞学学校を舞台にしたり修辞学教師を登場させたりしなければならぬ必然性はない。また、「饗宴」以後アガメムノンらはもはや登場しない。「饗宴」導入以外のなんらかの必然性があるって学校を舞台に選んでいるとすれば、それはやはり修辞学そのものに関して作者が何かをやりたかったということである。主人公の愚かさを描くためだけに、わざわざ修辞学批判のスピーチをやらせているとは考えがたい。

(3) それではペトロニウスは修辞学に関して何をやりたかったのか。答えはすでに出してあるが、最後に改めて考えてみよう。

エンコルピウスとアガメムノンのスピーチのスタイルが仮想弁論、あるいは弁論一般のスタイルをまねたものであるということは第二章で述べた。しかし、ペトロニウスがここで *declamatio* のパロディーを意図しているのではないことは明らかである。なぜなら *declamatio* のパロディーが目的ならば、本来の *declamatio* の形式である *controversia* か *suasoria* をそっくりそのまま作り上げればよいからである。修辞学教育批判という、仮想弁論の一般的形式とは異なるものをわざわざ選んでいるからには、パロディーではなく内容そのものが作者にとって重要であったと考えるべきだ。つまり、ペトロニウスは修辞学教育批判をやりたかったのである。

これに対しては次のような反論がありうるだろう。*declamatio* のパロディーを行うことが目的ではないとしても、*declamatio* 批判を *declamatio* のスタイルで行わせるということ、コミカルな効果を狙っているのだと<sup>(17)</sup>。これに答えるためには二つの点を指摘しなければならない。まず一点目は、*declamatio* あるいは弁論一般のスタイルを用いていること自体はアイロニー説の根拠にならないということである。そのように主張する人々は、明言してはいないが、「本来ならば修辞的でない日常会話の文体で話しているべきなのにそうでないから」と考えているようだ。しかし、古代においては登場人物のスピーチを日常会話のスタイルでリアリスティックに再現するという発想はなかったのである。確かに、ペトロニウスは「饗宴」の中で出席者の解放奴隷のスピーチに対してまさにそれを実行している。しかしこれは例外中の例外であり、「軽蔑」「からかい」という特別の意図があったのである。というのも、「饗宴」から一步外に踏み出すと、「饗宴」の解放奴隷と

同様の扱われ方をしても不思議ではない低い階層の人物のスピーチが非常に整ったスタイルで作られているからだ<sup>(18)</sup>。一般的に言って、古代小説の会話のスタイルは多かれ少なかれ「修辭的」なのである。第二章で指摘したように、「誹謗」というものは「予備演習」の練習項目であったし、仮想弁論や実際の弁論でも重要な要素であった。ペトロニウスが登場人物に文芸批評、文化批判をさせようとした場合、それを修辭弁論のスタイルで語らせるのはそれほど不自然なことではなかったのではないか。

二つ目の注目すべき点は、エンコルピウスとアガメムノンのスピーチのスタイルがかなり異なるということである。エンコルピウスのスピーチは比較的明快であるのに対し、アガメムノンのスピーチは韻文以外の部分も非常に回りくどく読みにくい。例えば、喜劇の追従者を持ち出すところの文章は長く構文が複雑である。親が子供の教育を急ぐことに対する批判の部分の比喩、例えば自分の子供のことを「自分の希望 (spes suas)」と言い換えるような比喩は、じっくり考え直さないと理解できない。エンコルピウスも比喩を用いているがどれも分かりやすいものである。作者が意識的に二人のスタイルを全く異なったものに作り上げたことは間違いない。「declamatio に対する批判を declamatio のスタイルでやる滑稽さ」を狙っているのであれば、なぜエンコルピウスのスタイルもアガメムノンなみに大げさなものにしないのか。たとえ「仮想弁論風、修辭弁論風」ではあるにしても、このようなすっきりしたものであっては滑稽味は全く期待できない。そもそも、エンコルピウスは修辭学教育そのものを批判しているのではない。彼は「雄弁 eloquentia」の重要性を強調している。彼が批判するのはあくまでも内容空疎で誇大なスタイルに力点を置く教育なのだ。したがって、修辭弁論に関わるものはすべて悪ということにはならないはずだ。ここでのエンコルピウスのスタイルは、修辭弁論風のものではあっても、作者自身がよしとするスタイルではないのか。

そうなるどころではアガメムノンのスピーチがアイロニーの対象であるという可能性が高まることになる。アガメムノンのスタイルは明らかに構文が複雑で表現が婉曲であるからだ。それは韻文に移るとさらに激しくなる。ペトロニウスは「こういう文体も作れる」ということを誇示したかったのかもしれないが、やはり悪趣味な文体の見本としてアイロニカルに作っていると解釈するのが自然である。修辭学教師が日常会話でも declamatio のスタイルで語っていたなどとは考え難いが、リアリズムを追求してはいない文学作品の中でのことであるから、いかにも修辭学教師にふさわしい大げさなスタイルであると受け取られるであろう。さらに主観的な判断でしかないが、詩の部分はどうみても大仰なまずい詩である。アガメムノンのスピーチは、スタイルに関する限り作者の趣味とは全く一致しないものであると考える。

それでは、「スタイルがアイロニーの対象になっているのだからその内容

もアイロニーの対象であるはずだ」と判断すべきなのであろうか。私は、教育の荒廃は親の責任であるという主張と理想的教育像の主張はアイロニーの対象ではないと思う。すでに述べたように、私の根拠は「そう判断できるほど極端にばかげたものではないから」という消極的なものである。しかし、もうひとつ別の根拠を挙げよう。エンコルピウスとアスキュルトスの口論場面にあるアスキュルトスのセリフである(Ch.10,1)。二人は修辞学愛好家(scholasticus)を装って学校に行った。しかしエンコルピウスとアガ멤ノンが例の会話を交わしている間にアスキュルトスはその場を逃げ出してしまった。後でそのことをエンコルピウスからとがめられたので、アスキュルトスが逆に反論しているセリフである。

An videlicet audirem sententias, id est vitera fracta et somniorum interpretamenta? Multo me turpior es tu hercule, qui ut foris cenares, poetam laudasti.

あのガラスの破片か夢占いみたいなセンテンティアを聞いているとでも言うのか。お前の方がもっと汚いぞ。外で夕食にありつこうとして、あんな詩人を持ち上げていたんだからな。

「センテンティア *sententia*」とはもちろんアガ멤ノンの言説に関して使われている。この *sententia* とはどういう意味であろうか。というのも、アガ멤ノンのスピーチそのものを指して言うのであれば、わざわざ *sententia* などという語を使う必要はない。*verba* とか *sermo* と言えば済むはずである。*sententia* という語をわざわざ選択しているからには、特別な意味で使っているにちがいない。それも文脈上修辞学との関連で使っているはずである。一般的な「文」というような意味はここにはそぐわない。修辞学用語としての *sententia* にはいくつかの意味があるが、ここでは明らかに「格言的言い回し」を意味している。この意味の *sententia* は、弁論の最も重要な要素の一つでありあらゆる箇所に織り込まれるが、特に込み入った議論をする際、そのまとめとしてパラグラフの終わりに置いたりする<sup>(19)</sup>。

アスキュルトスが *sententia* を「格言的言い回し」の意味で使っているとすると、これはアガ멤ノンのスピーチの何を指しているのであろうか。おそらくはスピーチの最後に付された詩のことを指しているのであろう。この詩は、その前に述べられている適正な段階を進む理想的な教育というものを韻文の形でまとめたものである。大セネカの作品から判断する限り、仮想弁論あるいは実際の弁論において韻文の *sententia* は見られない。しかし、それまでの議論をまとめるという機能を担っている点からして、この詩のことを指していると考えるのが最も自然である。また、アスキュルトスが *sententia* に

続けてアガメムノンのことを「詩人 poetam」と呼んでいることにも注目する必要がある。この詩のことを念頭に置いているのは明らかであり、皮肉を込めてそう呼んでいるのである。

つまり、アスキュルトスが嘲笑しているのはアガメムノンの詩なのである。ここで、「アガメムノンの言説の真価を理解できないアスキュルトスを作者はアイロニカルに描いている」などといった複雑な解釈をしない限り、作者もこの詩を「ガラスの破片か夢占いみたい」だと考えている、あるいは意図的にそのように作ったと解釈してかまわないはずだ。また、作者がアガメムノンのスピーチ全体をアイロニーの対象としているならば、ここで *sententia* などと言わずに、*verba* とか *sermo* とかいう単語を使えばよいのだから、この表現は詩以外の部分は嘲笑の対象から外そうという作者の意志が現れたものではないかと考えられる。

もう一度私の見解をまとめると次のようになる。エンコルピウスのスピーチもアガメムノンのスピーチ（詩の部分以外）も、内容に関してはペトロニウス自身の見解である。また、一般的に言って古代小説の会話のスタイルは日常会話のスタイルの再現ではなく多かれ少なかれ「修辭的」ではあるが、それを考慮に入れてもエンコルピウスとアガメムノンのスピーチは強く修辭的であり弁論のスタイルに近いものである。ただし、エンコルピウスのスタイルはペトロニウスがよしとするものであるのに対し、アガメムノンのスタイルはいかにも修辭学教師らしい大げさなスタイルをからかったものである<sup>(20)</sup>。作者は一種の文体遊びとして、異なる二つのスタイルを並べているのだ。

以上見てきたように、登場人物の性格付けやスピーチのスタイルという点で、作者ペトロニウスは「統一性、一貫性」というものを無視している。また、小説の全体構想というようなものも、あったとしてもゆるいもので、ある部分とある部分が齟齬をきたしていることが少なくない。その理由は、『サテュリコン』が決して「真実らしさ」「リアリズム」を追求する小説ではないということに求められる。この小説では様々なローカルな目的の方が優先されるのだ。「饗宴」のリアリズムはそうしたローカルな目的のひとつでしかない。今回扱ったような問題が生じるのも以上のような理由による。ある箇所作者のアイロニーが込められているか否かという問題は作品を読む上での重要なかぎであるが、それを判断する際、多くの学者がそうしているように、「一貫性」を根拠にすることはできない。その場その場での作者の目的を考えた上で判断する必要があるのだ。『サテュリコン』の中には登場人物が文学論を展開する箇所が他にもいくつかあるが、そこでも同様の注意が必要である。今回は冒頭の一場面だけを扱ったが、それらの箇所に関し

ても稿を改めて論じるつもりである。

(注)

◇テキストには K. Müller, *Petronius: Satyrice*, Lateinisch-Deutsch von K. Müller und W. Ehlers, München, 1983 を用いた。

◇本稿で言及された参考文献は以下の通りである。

R. Beck, *Some observations on the narrative technique of Petronius*, *Phoenix* 27, 1973, 42-61

-----, *Encolpius at the Cena*, *Phoenix* 29, 1975, 271-283

S.F. Bonner, *Education in Ancient Rome*, 1977, London

W.C. Booth, *A Rhetoric of Irony*, Chicago, 1974

-----, *The Rhetoric of Fiction*, second edition, Chicago, 1983

E. Cizek, *À propos des premiers chapitres du Satyricon*, *Latomus* 34, 1975, 197-202

G.B. Conte, *The Hidden Author*, Berkeley, 1996

F. Delarue, *L'Asianisme à Rome*, *REL* 60, 1982, 166-185

P. George, *Style and character in the Satyricon*, *Arion* 5, 1966, 336-358

G. Kennedy, *Encolpius and Agamemnon in Petronius*, *AJP* 1978, 171-178

W. KiBel, *Petrone Kritik der Rhetorik (Sat. 1-5)*, *RhM* 121, 1978, 311-328

C. Panayotakis, *Theatrum Arbitri*, Leiden, 1995

E.T. Sage, *Atticism in Petronius*, *TAPA* 46, 1915, 47-57

J.K. Schönberger, *Mitteilungen. Nochmals Petron c.1-5*, *Philologische Wochenschrift* 16/17, 18, 1939, 478-480, 508-512

-----, *Mitteilungen. Petron c.3-5*, *Philologische Wochenschrift* 45/48, 1940, 623-624

N.W. Slater, *Reading Petronius*, Baltimore, 1990

J.P. Sullivan, *The 'Satyricon' of Petronius*, London, 1968

P.G. Walsh, *The Roman Novels*, Cambridge, 1970

五之治昌比呂, 『サテュリコン』の「信用できない語り手」エンコルピウス, *西洋古典学研究* XLVI, 1998, 88-97

(1) *scholasticus* という語は必ずしも「学生」を意味しない。趣味で仮想弁論を作り、講演会などで朗読するマニアの大人のこととも意味する。この点に関して、詳しくは Kennedy (1978) を参照。

(2) Müller (1983) は *Attico* と読むが、これはアッティカ風 (*Atticus*) とアジア風 (*Asiaticus*) の対立の議論 (後述) を前提にしたもので恣意的すぎる。

写本通り *atroci* と読む。

(3) 拙論 (1998) を参照。

(4) 小説のある一節をアイロニーと解すべきか否かという判断がいかに困難なものかという問題については, Booth (1974, 1983) を参照。

(5) Beck (1973, 1975) は, 「主人公」エンコルピウスの人格と「語り手」エンコルピウスの人格とは全く別物であると論じた。つまり, 主人公は愚かであるが, 語り手はその時点から成長を遂げており, 良識ある人間になっているというわけだ。この説はその後批判され, 現在認める者はいない。

(6) Sage (1915), Schönberger (1939, 1940), Sullivan (1969), Cizek (1975) である。Cizek は Walsh (1970) の研究をまだ読んでいなかったようだ。

(7) 仮想弁論の主題の現実離れに対する批判としては, 大セネカ『コントロールウェルシア』3の序文の Cassius Severus の言葉, クインティリアヌス 2,9,3-5, 2,20,4, タキトゥス『弁論家に関する対話』35の Messalla の言葉などが挙げられる。

(8) Walsh (1970), p.84-85. Conte (1996), p.44-45.

(9) Kennedy (1978), p.172-73. 彼は「この箇所がペトロニウス自身の見解かそうでないかどちらとも言えない」と曖昧な態度を取っている。

(10) Bonner (1977), p.265 を参照。

(11) Walsh (1970), p.84-85. Slater (1990), p.28-31. Panayotakis (1995), p.1-8. Conte (1996), p.44-45, 132-134.

(12) Delarue (1982) の論考である。彼によれば, 古典期アッティカの作家の文体を理想とする一派は存在し, Attici と呼ばれていた。しかし Asianus あるいは Asiasticus という言葉はアジア出身の弁論家に対して使われただけで, 「アジア流派」などという概念は存在しなかった。文体に関して Asiasticus と言うとき, その特徴はたしかに華美なものとしてされていたが, それはあくまでも「アジアの弁論家の」文体ということである。そうした文体を理想とする「アジア流派, アシア主義者」といった一団がローマに存在したわけではないのだ。そのような概念が出来上がったのは, キケロの論敵であったアッティカ主義者が彼に対する批判の中で, 「アジアかぶれ」というようなニュアンスで Asiasticus というレッテルをキケロに貼ったことに始まるらしい。

(13) Sage (1915) と Sullivan (1969, p.85, p.261) は, アッティカ流派对アジア流派の対立はペトロニウスの時代にも歴然と存在していたと考える。彼らは問題の箇所に対してはアイロニー説を採らず, 『サテュリコン』の文体から判断してペトロニウスはアッティカ主義者であり, 冒頭箇所は作者の見解を代弁していると解釈する。ただしこれは論証を欠く。

(14) 根拠となっているのは, Ch. 10, 1の「お前の方がもっと汚いぞ。外で夕食にありつこうとして, あんな詩人を持ち上げていたんだからな。」とい

うアスキュルトスのセリフだけである。

(15) George (1966) は登場人物のキャラクターとその人物の用いるスタイルとの関係を論じているが、これとほとんど同じ結論に達している。ただしアイロニーの問題については深く立ち入っていない。

(16) この私の結論は、Sullivan (1969, p.117-19) の見解とほとんど重なる。彼は徹底したアイロニー説が流行する直前に本を書いているため、結果的に正しい見解にたどり着いている。しかし、彼の主張には賛成できない部分がある。彼は、ペトロニウスがエンコルピウスのような人格に問題のある人物の口を借りて自分の文学論などを表明したのは、その文学論に対して責任をとらなくても済むからだ、と結論づけている。これは誤っている。なぜなら、責任をとりたくなければ、作者と同一視される恐れのある主人公ではなく、エウモルプスのような別の登場人物に、すべての文学論を語らせればよいからだ。主人公には「饗宴」の中でのように、他の登場人物が文学論を開陳するのを聞かせておけばよい。

(17) Walsh (1970), p.84-85. Conte (1996), p.44-45. 「アイロニー」ということを前面に出してはいないが、George (1966) も同じ主張をしている。

(18) Ch.116,4-9 の差配のスピーチが最もよい例である。もちろんこれは、作者にからかいの意図がないからである。

(19) この点に関して大セネカの『コントロールウェルシア』と『スアソリア』は興味深い。これらの作品は個々の仮想弁論を丸ごとの形で集めたものではない。作品のほとんどの部分を占めるのは、著名な修辞学者が行った仮想弁論から抜き出した *sententia* のコレクションなのである。仮想弁論において *sententia* がいかに重要な要素であったかが分かる。これがひとつの聞き所であったわけだ。『サテュリコン』の他の箇所でも「格言的言い回し」という意味で *sententia* という単語が使われている (Ch.1,2, Ch.6,2)。

(20) Cizek (1975) も同じ結論を引き出しているが、内容の信憑性に関しては当然ペトロニウス自身の見解であるとして、論証は行っていない。